

鹿児島純心女子短期大学研究紀要 第50号, 149–165 2020

# Gプロジェクト2018

虹～つなげるキセキ～

佐々木 亘, 森永 初代, 濱崎 千鶴, 中村 民恵, 末永 勝征

G Project 2018

– Rainbow: A Connecting Miracle –

Wataru Sasaki, Hatsuyo Morinaga, Chizuru Hamasaki,  
Tamie Nakamura and Katsuyuki Suenaga

---

Gプロジェクトとは、学芸、情報、キルト、モード、フードの各プロデュースを学生が自主的に選択し、グループでの活動をとおして個性の伸長をはかると同時に、プロデュース力、グループ力、コミュニケーション力の向上と問題解決能力の育成を目的とする、現代ビジネスコースの中心となるプログラムである。今回のプロジェクトテーマを「虹～つなげるキセキ～」に決め、制作してきた作品の集大成を大学祭で発表した。さらに、錦江町との連携事業“地域貢献プロデュース”も6年目となった。各プロデュースがテーマに沿った作品をどのように制作し、演出・販売を行ったかを、学生たちのレポートを中心に報告する。

**Key Words:** [問題解決能力] [協働] [大学祭] [地域連携] [学士力]

---

(Received September 24, 2019)

## 序

Gプロジェクトとは、「プロデュース力・グループ力・コミュニケーション力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。現代ビジネスコースでは、専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた6つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めることが大きな目標である。集団での活動に対する自分の役割を見いだし、目標実現に向けた計画を実行し、それぞれ特定のテーマについて論じることができるように指導した。

今回は、学生一人ひとりが「虹～つなげるキセキ～」という想いを共有し、各自がトリプルパワーを発揮して具体的な成果へと結びつけた。まず、3部構成の発表部門では、学芸プロデュースが誤解を乗り越えて子供のころの夢を共に求める友情を描いた動く絵本で第1部を飾り、第2部情報プロデュースは、出逢えたキセキに感謝というコンセプトのもと、現代ビジネスコースの魅力を音楽に合わせて演出し、そしてモードプロデュースは、「虹色の幸せ」を様々なシー

---

\* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

ンに分けて個性的に表現した。

次に、2018年度で最後となるキルトプロデュースは、共同制作で「虹～つなげるキセキ～」を効果的に表現し、また現代ビジネスコース全員分の髪飾りを作成した。そして、フードプロデュースは、食品販売部門としてアップルパイとクッキーの制作と販売を行うと同時に、Gカフェで新商品を考案するなど、1,2年生が一致団結して、大学祭における憩いの空間作りに取り組んだ。さらに、6年目をむかえる地域貢献プロデュースは、錦江町の方々と協力し純心水田プロジェクトでのお米を使ったコラボスイーツの商品開発など、精力的に活動した。

本報告は、2018年度に行われた「Gプロジェクト」の内容に関する情報発信を目的としている。現代ビジネスコースにおける教育戦略は、この報告をPDCAサイクルの一つとして、さらなる発展を模索していく。

## I. 学芸プロデュース

3人での制作となった学芸プロデュースだが、役割分担のお陰でスムーズに序盤は進めることができた。それぞれの絵柄や得意分野は違うものの、ストーリーや演出など各々の好きな要素を詰め込んだ。また、脚本・セリフなどは佐々木先生を交えながら話し合い、方向性を決めた。私たちは学芸プロデュースの「動く絵本」という伝統は守りつつ、今までにないストーリーを目指した。矛盾点などないように全体の話の流れを考え、短い時間でも設定が伝わりやすいように工夫するのは、慣れない作業でとても大変。だが、意見を出し合いディスカッションを重ねることで、よりよい方向へ向かっていることも実感できる。それも学生たちで一から作り上げる学芸プロデュースの魅力なのだ。

キャラクター設定では初期イラストを驚くほど早い時期に完成させ先生方に見ていただいた。しかし、「その設定画は見分けづらい」、「キャラクターの家族構成や性格などの詳細が不足している」、と指摘を受けた。ストーリーに厚みを出すためにも細かな設定は必要不可欠。そういった詳細設定を決めたときに初めて、キャラクターの特徴や性格が作品にも表れたように思う。また、見分けにくいという点では、髪色を分ける・服装の雰囲気を変えることで、初めて見る方の印象にも残りやすいように工夫した(図1)。そうした細かい服装の設定を考えるときにもキャラクターたちの性格が役に立ち、イメージ通り決めることができた。このように全ての作業は繋がっており、妥協しないことで他の作業時にも生かすことができ、より良い作品作りに繋がるのである。



図1 冒頭の三人

制作の中で苦労したのは、イラストを動かす作業だ。おおまかなイラストはほぼ完成していたが、動きが足りずに大学祭前のギリギリまで描き足した。約8分間にわたる作品を飽きずに見ていただくには、多くのイラストで楽しませることも大切だ。同じイラストを複数回使用することを減らし、ところどころにアニメーションを付けることでストーリーに臨場感・迫力を増すことができるよう努めた。また、「動き」という点では、学芸・情報プロデュース間をど

のように動きをつけ、繋げるかに苦勞した。イラストと映像、同じ映像でも作風が全く違うものを発表部門のテーマに添わせ、どのように関連性を持たせるかで制作期間の終盤かなり悩んだ。それぞれの映像を壊さずよりよい作品にするために、お互いのイメージを摺り寄せることで正解を見つけ出すことができる。作品として大まかな部分は決まっていますが、制作期間中はストーリー変更や映像差し替えも多い。そうしたときに臨機応変に対応できるよう、作品としての完成度を高めるなど余裕を持った制作が大切ななのかもしれない。

一つの作品を作り上げた卒業生として後輩たちに伝えたいのが、早い段階で映像にすることの大切さだ。イラストはラフでも構わないので、一度繋げてどのくらいの長さになるのか見てみる。また、声を吹き込むことで、間や効果音のイメージも掴みやすくなる。そうすることで改善点が明確になり、効率よく制作を進めることができる。

録音・アフレコでは感情を込めることはもちろん、全体として繋げたときに違和感なく聞こえるようセリフを吹き込むことに苦勞する。それぞれのセリフごとに録音し、それらを切り貼りして一つの映像を作り上げるのだが、初めの頃は繋げたときに感情の込め方や抑揚・間などがバラバラで違和感ばかりだった。そこで臨場感を出すためにも、シーンごとに録音を進めるようにした。それにより自然な会話を演じることができた。また、息を切らすシーンでは階段を往復で走りこみ、そのまま録音スタジオに駆け込んで録音を行うなどリアルな息切れ感を演出するように試行錯誤を重ねた。

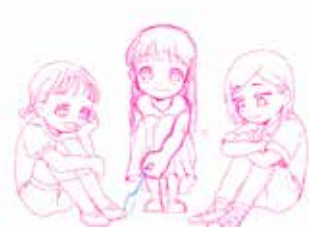


図2 幼いころの三人

録音を終え一つの映像にすれば、そこからが創意工夫を重ねなければならない本番の始まりだ。アフレコの音声に加え様々な効果音も入れるのだが、それぞれの音量調整や間の調節に手を焼いた。パソコンで流す時の音量・全体像と大講義室で流すものでは全くの別物である。いくらパソコン上で確認しても実際の環境で視聴しなければ問題点に気づけない。本番が近付く中で、セリフや効果音の調節、映像をさらに動かすよう改善を重ねた。それは本番の直前まで続くことになる。制作中の苦しい思い出は沢山あるが、妥協せず取り組んだことにより今では後悔なくやりきったと胸を張って言える。



図3 病室での三人

最後に、やはり全体像を見て現状を確認する。先生方や友人らから様々な意見をもらうという意味でも、早期に一連の映像を繋げることが大切だ。絵や音を繋げ一本の映像にすることで想像力も増すし、その後の制作も捗ることだろう。今作の反省点や苦勞した点の共有を行うことで、今後の学芸プロデュースの活動がより良いものになることを願う。(深河優芽)

## Ⅱ. 情報プロデュース

1年間を通してパソコンのスキルアップを目指し、WindowsやMacの機能を学び、実践的に活用してきた。前期の活動は、個々のスキルを高めることを目標とし、名刺や名前シールの作成、

卒業式、入学式、体育祭、聖母行列、アセンブリー等の撮影・編集・DVD制作などに取り組んだ。

情報プロデュースのメンバー 10名で、8月から「Gプロジェクト」の発表部門の映像制作を行った。テーマ「虹～つなげるキセキ～」をもとに、発表部門のチーフ・サブチーフが話し合い、学芸プロデュースが「キセキ」、情報プロデュースが「つなげる」、モードプロデュースが「虹」をテーマに制作することに決めた。

情報プロデュースでは、先輩方からの伝統を引き継ぎ、後輩たちに繋いでいく「つながり」と今まで関わってきた方々との「つながり」を表現していくことに決めた。

映像の冒頭で、伝統の継承についての表現として、私たちの映像の横に先輩方のDVDのジャケット写真を並べて映した(図4)。



図4 歴代のDVDジャケット

映像の中には、先輩方が生み出したキャラクターを出演させ、日頃の学生生活の助け合いの中で、特に印象に残ったことを言葉にして映像化した(図5, 図6)。大学祭への取り組みを進めていく中で、次のような反省点や改善点が出てきた。



図5 言葉のシーン1

一つ目は、「構成決め」である。最初に誰に何を伝えたいのかを明確にし、全員で共有してから、曲決めに取り掛かることを勧めたい。私たちは最初に曲を決めてからその歌詞に合うように構成を考えた。その結果、歌詞にとらわれてしまい、自分たちが観ていただく方に伝えたいと思う映像を的確に当てはめられないという事態が生じ、構成決めに予想以上に時間がかかってしまった。



図6 言葉のシーン2

二つ目は、「撮影」である。撮影を早く終わらせ編集に取り掛かるために係を分担した。しかし、自分が担当する撮影以外はどうのような映像が必要なのかをしっかりと把握していないため、人任せにしてしまうことがあった。また、服装等を統一していなかったことから、再撮影を強いられた。

三つ目は、「編集」である。iMovieやKeynoteなどを使用して編集に取り組んだ。iMovieやKeynoteなどを使いこなせる人と使いこなせない人がいたことによって、仕事量に偏りが出てしまった。前期の情報プロデュースの授業では、iMovieやKeynote, GarageBand, Pagesなどの多くのアプリを使用し、様々な機能を学んで、大学祭の活動に活用してほしい。

四つ目は、「リハーサル」や「ミーティング」の重要性である。リハーサルについては、発表部門全員で本番通りにリハーサルを進めることも流れを知るために必要だが、学芸プロデュース、情報プロデュース、モードプロデュースが各自の時間を使って大講義室でリハーサルをすることも重要である。その時間を使い、改善点などを見つけることができるので、大講義室の使用時間もそれぞれしっかりと話し合う必要がある。

ミーティングについては、先輩方からも必要と言われていたのにもかかわらず、あまり頻繁にミーティングを行わなかった。ミーティングで話し合うべき内容は、各プロデュースの進み具合やお互いの問題点の共有である。また、参加するメンバーは必ずしもチーフ、サブチーフ



ではなく、それ以外のメンバーや先生方も交えて行うことで発表部門全員が気持ちや考えを共有する機会になる。2019年度以降はこのような形でより頻繁にミーティングを行うことを勧める。

この1年間情報プロデュースで経験してきたことは私にとって、かけがえのない思い出となった。情報プロデュースで学んだことを今後の生活に活かしていきたい。そして、私たちが先輩方に支えていただいたように、私たちも後輩たちのサポートをしていきたいと思う。

昨年度の情報プロデュースの先輩方から情報プロデュースの活動内容を引継ぎ、実際に活動が始まると、チーフとして何をしたらよいのか分からず、戸惑ってしまう場面も多々あった。

映像制作が思うように進まず切羽詰まり、来てくださった先輩方に「誰に何を伝えたいのか」を問われたときに、すぐ答えることができなかった。そこで、私たちは観てもらう人に何を伝えたいのか、そのためにはどのような映像、写真が必要なのか全員で話し合い、理解を深めることが出来た。この映像制作は私たちだけで制作したのではなく、多くの人に協力をいただければ完成できないものだった。この大学祭への活動を通して「出逢えたキセキに感謝」(図7)という言葉を感じた。また、「時間」の大切さも学んだ。自分だけではなく、他の人の大切な時間まで使っているので、十分に計画を立ててから行動することが重要である。これから、今までお世話になった方々への感謝の気持ちや時間を大切にすることを忘れず、学ぶ姿勢で成長していきたい。(宮下結衣)



図7 言葉のシーン3

### Ⅲ. モードプロデュース

2018年度は、モードプロデュースが10人、大裁女物単衣長着が2人の12人で舞台を構成した。モードプロデュースのテーマである「虹色の幸せ」を表現するためにどの順番がよいのか、どの組み合わせがよいのか決めるのに、例年よりも時間がかかってしまった。虹色を表現するために大裁女物単衣長着の次は白色のドレスで、始めることにした。白色のドレスから始まりだんだんと色づき、最後は水色のドレスと赤色のドレスで、虹ができる条件に欠かせない水と太陽の光を表現した。10月はじめに、演出を現代ビジネスコースの1、2年生に観てもらったが、自分たちの表現力が足りず、何を表現したいのかが伝わらないという評価をもらう。これをきっかけに舞台での練習を映像で取り、それを振り返りながら改善を重ねた。また、お互いの動きを客席から観ることで工夫を重ね、自分たちの演出が観ていただく方に伝わるよう工夫した。



図8 シーン1

#### シーン1 風にのるヤマトナデシコ (図8)

情報プロデュースの映像が終わり、スクリーンが上がりと同時に、大裁女物単衣長着の二人が現れる。ショールを虹に例えて、虹の柔らかさと手が届きそう



図9 シーン2

で届かない、遠いかなたに輝く虹を表現した。

### シーン2 光の天使 (図9)

光を抑えたシーン1から変わって、照明、スポットを同時に明るくし、白色のドレスが登場する。黄色のドレスが出てきた瞬間に照明の明るさを最大限にすることで光を強調し、ゆっくりとした曲調で、天使の微笑みを表現。

### シーン3 虹の妖精 (図10)

曲が始まると同時に明るい照明で、妖精が回りながら登場する。彼女が得意とするターンで動、ターンをしないシーンで静と、動と静をはっきりとさせた。アップテンポの曲を使用し、シーン1とシーン2とはがらりと印象を変えることで、単調な構成にならないよう工夫した。

### シーン4 虹のプリンセス (図11)

身長差が目立たないように常に二人が対照的に動き、手の位置も対称的にした。ドレスイメージとは真逆の大人らしさを表現するのにとても苦勞した。大人の女性はどのような動作をするか考え、エレガントに動くように意識していた。

### シーン5 嵐の魔女 (図12)

暗転から始まり、暗転で終わるという唯一の演出で会場を魅了した。歩くスピードや表情も今までと真逆にすることで観ていただく方に強い印象を持たせた。最後に手を伸ばすシーンでは一人で生きていく決意を手にしたことを表現した。

### シーン6 希望 (図13)

嵐が去った後に希望の光がさし、希望の光を探しながらも自信をもって歩き出す姿を表現。最後に希望の光を見つけたシーンは何度も練習し、一番の笑顔を見せることができるよう意識した。

### シーン7 水の女王 (図14)

板に手をかけるシーンがあるため、気が強い女性をイメージしてしまいが、嵐とは違い、優しい雨を表現するために、優しく微笑み、柔らかな動作を心掛けた。次のシーンの二人と上手く交差するために秒数やタイミングを何度も練習した。

### シーン8 太陽の女神 (図15)

優しい雨が降った後の太陽をイメージ。照明もスポットも最大限に明るくし、二人が同時に出てくることで太陽の光を表現した。2018年度のテーマならではの演出として二人が重なり合って対照的な動作で、さらに強く太陽の光を表現した。最後は手と手を取り合い、「幸せの虹～あなたの心に届きますように」という文字とともに胸に手をあてて退場した。



図10 シーン3



図11 シーン4



図12 シーン5



図13 シーン6



図14 シーン7



図15 シーン8

### シーン9 エンディング (図16)

エンディングの曲名である「愛のカタチ」から幸せは心の中にあるという意味で何度も左胸に手を当てる表現をしている。幸せのカタチは人それぞれだが、それはみんな心の中にあるのではないかと思う。

最後に全員がそろった時、前で見ている先輩方、両親、友人が感動し、大きな拍手をくれた時には嬉しさと、感謝の気持ちでいっぱいになった。



図16 シーン9

昨年度の先輩方の反省として、テーマを理解するための話し合いが足りず、学生一人ひとりのテーマの理解度に差があった、テーマが反映されていたのか知ることができなかったということが挙げられていた。2018年度はその反省を活かし、テーマについての理解度を数値化し、目に見える形で分かるよう、アンケート調査を実施することにした。今回はその中でも、発表部門についてのアンケートの結果と内容をまとめる。(山口桃佳)

## IV. 発表部門アンケート

Gプロジェクトの活動を開始して、10年目となる今回はこれまで実施することのできなかった本取り組みの理解度を測るアンケート調査を計画していた。しかし、山口桃佳の報告からもわかるようにアンケート調査を実施するのは容易ではなかった。

実際にアンケートを作成したのは大学祭が終わってからとなり、発表部門の舞台構成との同時進行にはかなり無理があった。大学祭後にアンケート作成、プレアンケートを2018年11月28日(水)に現代ビジネスコース1年生に実施、12月11日(火)に同じアンケートを2年生に実施した。結果、回答に偏りがあることがわかり、記述の内容を再度検討し2018年12月19日(水)に現代ビジネスコース1年生72名に記述式でアンケート調査を実施した。その結果については山口桃佳の報告に記載されている。

発表部門のアンケート結果から「92%の学生からテーマが反映されているのがよく伝わったと答えたが、8%の人には伝わらなかった。コーステーマを意識して、作品作りをしてきたつもりだったが、全員には伝えることができなかった」と述べている。自分たちの考えを他者に理解してもらうためには、まずは協働する1年生にコーステーマに対しての理解を深めることが重要であると学ぶことができたのではないかな。

今回のアンケート作成については各チーフが中心となり作成したが、アンケートを作成する過程において「大学祭が終わってからアンケート作成に取り掛かったため、実施までに時間がかかった。早い段階からアンケート調査について計画を立て、目的を明確にする必要があった。アンケートの質問の仕方や解答項目も相手のことを考え、わかりやすく作成することが大事であることを学ぶことができた。」と報告している。アンケートの項目を作成することで学生にとってはPDCAサイクルを実践することができたと思う。

さらにアンケートを作成する過程において、プレアンケートの改善点やアンケート集計については2年生全員で活動したことで、大学祭後にも「チームワーク」を深めることができたというリーダーたちが報告している。PDCAサイクルを意識して実施することができたことはディプロ

マポリシーの「問題発見とその解決のために、これまで学んできたことを総合して自律的に行動できる」ようになった現れと考えるが、学習成果の査定を活用し今後検証していく必要がある。(中村民恵)

昨年度までは、Gプロジェクトの活動内容について卒業研究発表会で報告してきたが、これまで「Gプロジェクトのテーマが反映されているか」を測ることができていなかった、という反省からアンケート調査を試みた。その結果について報告する。

共に活動した1年生が今回のテーマである「虹～つなげるキセキ～」をどのくらい理解していたのか、その理解度を測ることで私たちのプロデュース力を明確にするためにアンケート調査を行った。アンケート結果をもとに、来年度のGプロジェクトがさらによくなるように1年生にバトンを繋いでいく。また、大学祭にお越しいただいた皆さま方に私たちのメッセージがより明確に伝えられるようGプロジェクトを充実させるためのアンケート調査でもある。

調査の目的は、「テーマの理解度を測る」、「どの程度テーマが反映されていたかを測る」、「反省点や改善点を見つけて来年度の活動に反映させる」である。

実施したアンケートの内容は、「Gコースの発表に、Gコースのテーマ『虹～つなげるキセキ～』が反映されているのがよく伝わりましたか。」についての結果は、92%の学生からテーマが反映されているのがよく伝わったと答えたが、8%の学生には伝わらなかった。コーステーマを意識して、舞台の演出をしてきたつもりだったが、全員には伝えることができなかった。改善策として以下の点が挙げられた。2018年度は、チーフ・サブチーフのみでテーマについて話し合ったため、もう少し早くから発表部門全体で話し合う必要がある。また、構成を決める段階でもう少し全員がテーマについて深く考え、舞台構成や表現に反映させる。

今回は、大学祭が終わった後にアンケート調査を行ったため、現代ビジネスコースの1年生と2年生にしか調査することができなかった。

2018年度は、初の試みとしてアンケート調査を実施したが大学祭が終わってからアンケート作成に取り掛かったため、実施までに時間がかかってしまった。早い段階からアンケート調査について計画を立て、目的を明確にする必要があったと感じた。また、アンケートの質問の仕方や回答項目も相手のことを考え、わかりやすく作成することも大切なことを学ぶことができた。2019年度も、これらの反省点を踏まえ、アンケート調査を実施してほしい。

発表部門のチーフをさせていただけることになったとき、正直、私は先輩方の伝統を引き継ぎ、観ていただく方に自分たちのテーマを理解してもらえらるだろうかと、不安な気持ちでいっぱいだった。

実際に活動してみると制作は遅れており、舞台構成も決まらず、発表部門全体の連携を取るのも難しかった。より良い発表をするためには、いかに3つのプロデュースがうまく連携を取るかで決まると分かっていたにもかかわらず、時間をうまく取れなかった。思い通りにいかず、何度も悩み、申し訳ない気持ちや悔しい気持ちで何度も涙を流してきた。そんな時に支えてくれたのは、先生、先輩方、家族、サポートをしてくれた1年生、そして何より一緒に頑張ってきた現代ビジネスコースの仲間達だった。私一人では絶対に大学祭を成功させることはできなかった。一緒になってどうしたらよいか考え、支えがあったからこそ達成感を得ることがで



きた。思い返してみると長いようで短かったように感じる4月からのこの7ヵ月間は、私たちにとってかけがえのない宝物である。

モードプロデュースを選択して、たくさんの気づきや喜び、苦しみがあった。私はモードプロデュースを選択し、総合チーフという貴重な経験をさせていただけたことで、自分自身が成長したと実感している。支えてくださった方々に改めて感謝の気持ちを伝え、これからの人生にこの経験を活かし、自分を支えてくださった方々を今度は自分が支えることができるように成長し続けていきたい。そして、先輩方が私たちに届けてくださった心を後輩にも引き継いでいきたい。

今回のアンケート結果から、テーマについての理解度が不十分だったということや大学祭に向けて1、2年生が一緒に活動していく中で、テーマについての理解が深まっていたということがわかる。また、説明できるくらい理解しているという1年生はほとんどいなかったため、1年生全員が理解していなかったこともわかる。このことから、テーマについて説明する機会を増やし、早い段階から1、2年生のミーティングを定期的に行うことが大切だと実感した。

今回のアンケートを実施するまで、第1回目は11月28日水曜日に現代ビジネスコースの1年生を対象にプレアンケートを行い、その後、同じアンケートを2年生にも実施し、改善したものを12月19日水曜日に本アンケートとして実施した。

プレアンケートでは、Gコースのテーマについて理解している人が100%という結果となるなど、全ての質問において回答が偏っていたことから、正確な数値だったのか疑問に思い、現代ビジネスコースの2年生にも同じアンケートを行い、どのくらい理解しているのかを調査するとともに改善点を2年生全員で考えてもらうことにした。

その結果、2年生のアンケートでは、理解していると答えた人は100%ではなかった。プレアンケートを実施し、2年生全員で問題点を考えたところ、「質問内容が分かりにくい」、「判断基準が曖昧である」、「回答項目が少ない」、という問題点がわかった。また、回答項目は、「はい」と「いいえ」だけの回答項目を作ったが、回答が偏らないよう、また、回答する人がわかりやすいように説明できるかを基準とし、4つの項目を作成した。

本アンケート実施までの流れを通して、アンケートを作成するには事前の準備が必要ということや相手にわかりやすい質問内容を考えるということが大切だということを理解することができた。そして、プレアンケートの改善点の話し合いや、2年生全員で集計をする中で、チームワークが深まったように感じている。

私たちは、今回のアンケート調査をする中で、PDCAサイクルを意識しながら、内容や実施日の計画を立て、1年生にプレアンケートを実施した。さらに、2年生にも同じアンケートに回答してもらい、問題点を発見してからプレアンケートを改善するというサイクルで行い、本アンケートを実施した。

大学祭が終わってからアンケート作成に取り掛かったため実施までに期間が空いてしまったことから、早めにアンケート調査に取り掛かることが必要と痛感している。また、アンケートを取る目的をはっきりさせ、その目的をしっかりと全員に説明できるよう準備しておくことも必要であることを学んだ。アンケートの内容は、相手にわかりやすくなるよう質問の仕方を工夫することの大切さや、回答項目の作り方がとても重要であるということも実感している。

今回私たちは現代ビジネスコースのみを対象にアンケート調査を行ったが、対象を各学科・専攻・コースにするとよりよいアンケート調査になると考える。アンケート調査を実施するためには目的をしっかりと把握して、その目的を回答者の皆さんにも十分に説明したうえで来年度は実施する必要がある。(山口桃佳)

## V. キルトプロデュース

2018年度で最後となるキルトプロデュースは、14名といつもより多い人数での活動となった。これまでもそうであったがキルトプロデュースを選択する学生は、作ることが好き、苦手な裁縫を克服したい、母親または祖母がしていたなど、理由は様々であるが、器用・不器用がはっきりしている。しかし、個人差はあるが、作品制作をとおして、技術をしっかりと身につけ活かすことができるようになっていく。と同時に計画をたて、実行する力、作品に想いを込めて表現する力を少なからず身につけることができるようになっていく。

個人制作において、前半は大学祭で展示する作品となるため、見栄えも考えて制作させるが、後半は、基本的には今後使えるもの、または研究課題に関係するものを条件に制作活動にあたるように、そして制作するにあたりミシンも使用するよう指導している。これは、手縫いとミシンの違いを理解すると同時に、使い分けができるようになればとの想いである。もう一つの活動である共同制作は、協働性を身につけるために欠かせないものである。共同制作に関しては、学生の報告を参考にしていきたい。

2018年度は、個人・共同作品に加え、もう一つの作品制作を試みた。それは、「パートナーシップキルト」に参加したことである。毎年東京国際キルトフェスティバルの中で行われており、15cm正方のトップのみを制作し、主催者側に送るものである。2019年のテーマは「ハウス」、学生たちは思い思いの「ハウス」を制作した。送られた作品は、154枚繋ぎ合わされキルティングが施されて大きな作品となり会場である東京ドームに展示される。その後、チャリティー作品として使用される。学生本人たちは実物を目にすることはできなかったが、自分の作品が含まれている作品の写真は見る事ができた。ほんとに小さな作品であるが、誰かのために役立つ事ができたという想いはあったのではないかなと思う。

また、見る目を養い、次の作品に役立てることができればと思い、「本場大島紬フェスティバル」を見学に行った。ジャンルは異なるが、他の作品を鑑賞することで違った視点から見る事の大切さも感じてくれたのではないかなと思う。

1年間の活動をとおして、一人ではなく仲間とともに制作することの楽しさと難しさを実感し、ただ単に制作するのではなくそこから多くのことを学び、得ることができたのではないだろうか。これから社会に出ていく学生一人ひとりが、これまでの学びをさらに深め、活躍していくことを願う。(濱崎千鶴)



図17 制作風景

2018年度は、14名での活動となった。個性豊かなメンバーと常に賑やかな雰囲気の中で制作

に取り組むことができた。一人ひとりの個性が強く、まとめることができるのかという不安もあったが、制作を進めていくうちにお互いに助け合って取り組む姿勢ができ、ひとつにまとまっていった。

個人制作では、バッグや壁掛け、ポーチ、クッションカバーなど日常生活の中で使うことができるものを制作した。裁縫の本や雑誌を参考にしながら自分の気になる形やデザイン、柄や模様などを決め、それぞれがオリジナルの作品に想いを込めて制作した。

2018年度の現代ビジネスコースのテーマは、「虹～つなげるキセキ～」であった。キルトプロデュースは本年度で最後の活動になるということもあり、作品を見てくださった方々に感動を与えられるようにとの願いを込めて、今までの中で一番大きい作品を制作することにした。そこでテーマをもとに、キルトプロデュース選択者全員にデザインを考えてもらい、話し合いをして基になるデザインを決めた。

デザインのポイントは、雨を表現した円(図18)と晴れを表現した円(図19)を中心に大きく作ったところだ。テーマにある「虹」は太陽の光と雨によって作られるため晴れのデザインの中に取り入れた。また雨の円の中では枯れていた花が、晴れの円の中で再び咲くという「キセキ」も表現した。そして、キルトプロデュースは活動を終えるが、伝統はずっと続いていくという思いも込めて、円と円をつなげ無限大を表した。

6月24日に濱崎先生とキルトプロデュース選択者4名で布を購入しに行った。共同制作では優しいクリーム色を背景にし、晴れの円では虹色をイメージして様々な色を使うことにした。店内には布が多くあり、色合いや柄など悩んだが、最終的には全体的に優しい印象を与えられる作品に仕上げるためにあえてシンプルな生地にした。

制作は8月6日から開始し、10月23日に完成した。

夏季休業中は髪飾りを制作するグループと共同制作の晴れを表現した円を制作するグループ、雨を表現した円を制作するグループの3つのグループに分けて制作に取り組んだ。晴れを表現した円ではテーマである虹をイメージし様々な色の布を組み合わせ、背景とした。雨を表現した円では雲にラメの入った布を上から縫い付け、可愛らしい雰囲気にした。アップリケの部分はキルティングをし、一つひとつの場所が膨らみ立体感が出るようにした。

次に、完成した円と円を一枚の布の上にまつり縫いで縫い付けた。針目が大きいと浮いてきてしまうため、細かく丁寧に縫うことを心掛けた。トップが完成すると、裏布、キルト芯、トップを重ね、キルティングの準備に取り掛かった。それぞれのパーツが膨らみ立体感ができるように、アッ



図18 共同制作の右側



図19 共同制作の左側



図20 共同制作のテーマ

ブリケした部分と縫い合わせ部分には、全て落としキルトを施し、テーマの部分は5mmくらい外側にキルティングを施した。また、空いているスペースにはそれぞれが思い描く花を自由にキルティングし、様々な形や大きさの花が散りばめられた。その後、現代ビジネスコースのテーマをリバースアップリケの技法を用いてつけた。キルティングが多く、時間が掛かったため完成が大学祭ぎりぎりになってしまったが、空きコマの時間やプロデュースの時間を上手く活用し、協力しながら完成することができた。

昨年度の髪飾りが「シュシュ」であり、今年は何か違うもので気軽に皆につけてもらえるものにしようという意見から、「リボンの髪飾り」という案が出た。テーマが「虹」ということから様々な色が入った布を使用して髪飾りを作ろうと決めた。

髪飾りの布、ゴムは6月24日に購入した。作業工程としては布を裁断し、リボン型に合わせてミシンをかけ、ゴムひもに結びつけるという工程であった。最初は下書きしたリボン型に沿って、ミシンを綺麗にかけることが難しかったが、後半はコツを掴み綺麗に縫うことができるようになった。皆で分担しながら丁寧にかつ早く制作することが出来たと思う。



図21 髪飾り

(左：1年生、右：2年生)

先輩方から受け継いだ髪飾り制作の伝統を途切れさせることなく、そして大学祭に向けて現代ビジネスコースの1、2年生全員が心を一つにして協力し合い、大学祭の成功に繋がるようにとの想いを込めて制作した。今回は、1年生が青を基にした髪飾り、2年生と先生方がピンクを基にした髪飾りを作った。大学祭前から髪飾り(図21)を身につけている姿を目にし、日常生活で使用してもらえて嬉しく感じた。

個人制作では、それぞれがもっと計画的に制作に取り組むべきだったと思う。自分のことでいっぱいになり制作が遅れている人に気づくことができなかったため、もっと周りを見て、お互いに進捗状況を確認し声を掛け合うべきであった。

共同制作では、積極的に制作に取り組む学生もいれば、そうでない学生もあり全員が同じ気持ちで制作に取り組むことが難しかった。しかし、制作に取り組む中で声掛けを行い、最終的には皆で協力して制作に取り組み、完成することができた。

制作に取り組み、同じ時間を共有することでキルトプロデュースの絆も深まり、また、長く受け継がれている伝統を私たちも受け継ぎ、次の後輩へと繋ぐ大切さも実感した。

プロデュースの活動を通して、制作方法はもちろんのこと周りを見て、相手のことを気に掛けることの大切さ、想いは言葉にしなければ伝わらないことなど多くのことを学ぶことができた。これらの学びの中で集団の中での自分の役割を理解し、行動に移す力が身についた。今後自分のすべきことを見つけ、行動していくことができる人でありたいと思う。(井上未悠)

## Ⅵ. フードプロデュース

フードプロデュースでは、地元鹿児島の食について知識を深め、実践できるようになるために、郷土料理や郷土菓子を作り、鹿児島の食材を用いて自分たちで献立を立て実習を行う。ま



た、大学祭の準備、販売品の制作など、グループ活動をとおして、考えて行動する力、相手の意見に耳を傾ける力、相手の想いに気づく力を養い、磨きをかけることができる。

2018年度も昨年同様、調理実習においてグループ編成を多少変えてみた。そうすることで、その都度、グループ内で仕事分担をし、自分の役割を考え、コミュニケーションを取りながら行動することができるようになったと思われる。このことが、グループ活動が中心となる大学祭の活動のなかで良い結果をもたらしたのではないか。大学祭の活動内容は、学生の報告を参考にさせていただきたい。

実習だけではなく知識も身につけてほしいとの想いで毎年依頼している「鹿児島県特産品協会」での講話において、これまでは「食」というより「食に関わるもの」が中心であったが、今年は鹿児島の食材を中心に講話をしていただいた。講話をとおして、学生たちは地産地消の大切さを実感し、鹿児島のおいしい食材をもっと県外の人にも知ってもらいたいという想いが強まったようである。また、自主研修の食材調べにおいては、販売店によって、地元の食材を多く取り扱っているところもあれば、他県のものが多いところもある、消費者のことを考えて、食材を並べる工夫がなされていることなど、多くの気づきがあったようである。

「食」は生きていく上で不可欠なものである。その「食」をいかに活用していくかは本人次第である。実習や研修をとおして学んだ「鹿児島の食」の良さを、一人の消費者として、ゆくゆくは母親として活かし、次の世代に繋げていってくださることを願う。また、1年間の活動をとおして得た力を、これからの新しい出会いの中で十分に活かし、社会貢献に役立ててくださることを期待する。(濱崎千鶴)

大学祭においてフードプロデュースは食品販売部門に所属しており、2018年度は選択者34名での活動となった。アップルパイ、クッキー、Gカフェの3つの部門に分かれ、大学祭で販売をする商品の試作や制作を行う。アップルパイはフードプロデュース選択者34名全員で制作を行い、クッキーは1年生が主体となって制作、そしてGカフェは1年生と2年生が合同で運営を行う。

各部門チーフ・サブチーフを決め、それぞれがしっかりと情報を共有することによって、全体での活動もスムーズに行うことができた。5月からは昨年の先輩方から引き継いだことを活かし、各部門それぞれ試作をスタートした。以下に各部門の活動内容等を報告する。

純心伝統のアップルパイ（図22）は、フードプロデュース選択者が一丸となって制作を行う。2018年度は100円値上げし、1,300円で販売することになった。

制作するにあたり、先輩方が残してくださった作り方のDVDを事前に見て全員が作業の流れを把握してから取り組むことにした。味も見た目も良く、心のこもったアップルパイが制作できるよう5月から練習を重ねた。制作を行うなかで分からない点や難しかった点はしっかりと伝え、全体で改善していくことが大切だと感じた。現状を共有し、上手な人からコツやポイントを伝えてもらい、実際に制作している様子を見たりすることで改善に繋げることができたのではないかなと思う。



図22 アップルパイ



販売用制作は流れ作業で行う。一日がかりでの作業であったため、だらだらとした雰囲気にならないよう気をつけ、一人ひとりが丁寧に作業に取り組んだ。その結果、今までで一番いい出来に仕上がった。

クッキーは1年生の商品として販売する。2018年度は現代ビジネスコース11年目であり、新たな一年目ということで新商品を作ることが決定し、錦江町産のれんこんパウダーとハーブを使用したクッキーを新たに加えた「大隅半島海と大地の恵みパック」と「現ビパック」を大学祭で販売することとなった。

主に試作は2年生のクッキー係を中心として行い、1年生のクッキー係とも協力して活動した。クッキー制作はチームワークが大切であるため、本番用制作の班もCTTの班となるべく同じになるようにした。協力して作業に取り組むことができていたのではないと思う。クッキーは1袋100円で販売し、2日間で「現ビパック」377袋、「大隅半島大地と海のめぐみパック」186袋を販売した。また、余ったクッキーや形が崩れてしまいお客様に販売できないクッキーは、学生販売用として1袋50円で135袋販売した。

Gカフェでも新商品を考案するため、現代ビジネスコースの2年生を対象にアンケートを実施した。その結果から一番人気の高かったレモネードとGカフェで毎年人気のゼリー系の飲み物を組み合わせた「レモネードゼリー」を新商品として販売することに決定した。また、昨年のメニューにある「バニラオレ」は「バニラキャラメルオレ」、「大人のカフェオレ」は「ほろ苦カフェオレ」としてリニューアルし、販売することになった。さらに、2018年度からエスプレッソ液を作るコーヒーマーカーを新しくし、ビアレッティ社モカエクスプレスをを使用することになった。

Gカフェでは大学祭当日に制作から販売まで行うため、注文から受け渡しまでの流れを把握し、ミスなくスムーズに作業が行えるよう事前に実践練習を行った。大学祭当日は、何が起こるかわからないため確認を怠らず、周囲をよくみて臨機応変に動き、声掛けも積極的に行うことが大切だと感じた。すべて完売し、不明金も出ることなく終えることができたので良かった。

2018年度大学祭の総売り上げは以下の通りである（表1）。

表1 大学祭総売上（単位：円）

部門	売上高	材料費	純利益
アップルパイ	130,000	83,962	46,038
クッキー	63,050	29,413	33,637
Gカフェ	185,600	106,823	78,777
合 計	378,650	220,198	158,452

フードプロデュースは他のプロデュースに比べて人数が多いため、全員を一つにまとめ協力して頑張る環境を作ることは大変だった。しかし、フード全体や各部門のチーフ・サブチーフ



図23 クッキー制作風景



図24 Gカフェ商品

とのミーティングを行うことで気持ちを一つにし、大学祭へ向けて取り組むことができた。また、フードプロデュースだけでなく、他のプロデュースからの協力や、試食試飲をしていただきアドバイスをくださった先生方のおかげで、大学祭で無事商品を販売することができたのだと思う。

今まで多くの活動を行う中で、準備・確認不足による失敗が多くあった。しかし、このことから周囲の人たちと確認を徹底し、事前準備をしっかり行うことや情報共有の徹底、お互いに協力し合いながら活動することの大切さなどを実感し、学ぶことができた。

これからも周囲への感謝を忘れず、思いやりの気持ちをもって行動できるような人になりたい。後輩たちも伝統を引き継ぎ、全員で協力して次の大学祭へと向けて頑張ってほしいと思う。

(大山瑞希)

## Ⅶ. 地域貢献プロデュース

6年目の地域貢献プロデュースの選択者は20名であったが、同じ活動に全員で参加することは難しく、チーフを中心に分担して活動を行なった。鹿児島市での「お茶の振る舞い事業」では、他校のボランティア参加により希望日に参加できなかつたり、悪天候で前日に中止が決定したり、体調不良等で急な欠席者が生じたりしたため、対応に迫られた。また、どのイベントに誰が参加したかなどの確認に時間を要したこともあり、例年に比べ、チーフへの負担が大きかった。

2年次の1月に活動報告会を実施し、1年間の活動を振り返り、3つの到達目標についての自己評価を行なった。「他者との関わりの中で自己理解を深め、協働する姿勢を習得する」という到達目標について、チーフの坂口綾菜は「自分で抱え込んでしまうこともあったが、声をかけてくれる友人のおかげで計画的に進められた。」と述べている。また、地域貢献で学び成長した点については、「以前はあまり積極的に動く方ではなかったが、自分からすべきことを探して積極的に行動できるようになった。また、地域の方との会話を通して温かさや優しさを感じ、改めて人との関わり大切さを実感した。」と報告している。その他の学生も「全ての活動は1人では達成できず、みんなの協力があってこそ成り立った。」「相手が求めることを察したり、先を見て行動をしたりすることの重要性を感じた。」と回答するなど、地域貢献活動が、短大2年間の学びを実践し成長する機会となっていることがわかる。

なお、活動に関する詳細は、チーフである坂口綾菜の報告を参照されたい。(森永初代)

2018年度は、例年どおりの活動として「半島隅くじら元氣市」、「錦江町田舎市場」、「いきいき秋祭り」での特産品販売補助、錦江町の純心水田で田植えから稲刈りまで行う「水田プロジェクト」、そのお米を使ったコラボスイーツの商品開発、おはら祭りに参加した。また、2018年度は新たに、鹿児島市の「お茶の振る舞い事業」、錦江町でのコラボスイーツCM撮影への参加を行った。

「お茶の振る舞い事業」とは鹿児島観光コンベンション協会が主催する活動であり、「かごしま茶」の消費拡大を図るものである。2018年は明治維新150周年を迎え、NHK大河ドラマ「西

郷どん」の放送などを通し県外から多くの観光客が鹿児島を訪れた。鹿児島観光コンベンション協会とは、観光客の誘致や、各種大会・会議・イベント等の誘致などに関する事業を行っており、国際相互理解の増進や地域経済の活性化・文化の向上に寄与することを目的としている。この事業において、私たちは、「維新ふるさと道」と「西郷隆盛生誕の地」で、鹿児島県産のブランド茶と郷土菓子のセットを100円で販売補助を行った(図25)。活動開始当初、観光客との会話を通して自分たちの鹿児島についての知識のなさを痛感したので、その後は観光名所の場所を把握し、観光客の皆様に説明できるように努めた。



図25 お茶の振る舞い

例年、コラボスイーツのCM撮影をローソン鹿児島唐湊新川店で行っていたが、2018年度は錦江町のお茶畑、いちごハウス、花瀬川(図26)で行った。目的は、CMを見てくださる方に、錦江町の風景をお届けすることである。撮影が行われた2月12日は、天候が心配されたが、穏やかな天候に恵まれた。お茶畑では、鮮やかな緑が広がり遠くに海も見え、自然の豊かさが感じられた。いちごハウスでは、いちごの甘い香りが漂う中、赤く綺麗ないちごを手にとり撮影した。花瀬川では、恒例の「はさんじゃうぞ!」ポーズを決めた。今回撮影したCMは、2月27日から3月6日までKTS鹿児島テレビで34回放送された。私たち自身が生産者の方々の苦勞を知り感謝の気持ちを持つとともに、錦江町の魅力を改めて感じる機会となった。



図26 花瀬川での撮影

地域貢献活動に参加し、普段の学生生活では、味わえない貴重な経験をすることができた。初めてのことでばかりで上手くいかないことも多かったが、錦江町の方々や多くの学生の協力もあり活動を進めることができた。また、地域の方々が温かく迎えてくださり、活動を重ねるごとに感謝の気持ちを持って積極的に取り組む姿勢が定着していった。1年間をとおして地域の活性化のために一生懸命働く錦江町の方々の姿を見て、私たち自身が地元のために何かできることはないかを考える機会となった。卒業後も地域の活性化に関心を持ち、地元のために貢献したい。(坂口綾菜)

## 結び

もともと、Gプロジェクトは、「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略ーコミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成ー」という課題名で、2008年度から3年間、文部科学省の「私立大学等経常費補助金特別補助<教育・学習方法等改善支援>」における「学生の実験を重視した教育研究」の一つとして採択及び交付を受けて、進められた。

2018年度のGプロジェクトのテーマは、大学祭全体のテーマである「WA～繋がれ、広がれ、想い届け～」をもとに学生が考え、「虹～つなげるキセキ～」に決まった。現代ビジネスコースでは、個々の学生がグループ活動つまり協働の中でのコミュニケーションをつうじて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し、専門教育カリキュラムの特別研究に設け

られた6つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めるという目的を掲げてから、11年も経過している。

毎回、“Gプロジェクト”をつうじて、学生が多くの困難に直面しながらも、自分の能力を最大限に発揮し活動する機会を得たことは、大きな収穫である。これから社会人として活躍する学生たちが、「社会に必要とされる人材」として活躍するようになることが、現代ビジネスコーススタッフ全員の願いである。人間に無限の可能性が見出される限り、我々のプロジェクトはさらなる発展を目指してより精力的に続けていく。また、学士課程教育における学士力を意識し問題解決能力の育成など教育の質的向上に向けて成長させていかなければならない。そこに、我々の教育戦略が存在する。

